D 104　　近代の被服管理におけるマスメディアの役割

東京家政学院大　　吉永　フミ

（目的）明治18年創刊の「女学雑誌」を初めとする婦人誌は、20誌を越えたが、その盛衰消長は激しく、今日もなお存続しているのは、４１年（1908）創刊の「婦人の友」だけである。大正に入っては６年創刊の「主婦の友」一誌となった。当時の主婦に取って、雑誌は唯一の mass media である。この二つの婦人総合雑誌を資料として、1908～1945に於ける被服管理関係の記事につき、内容、時代背景、学校教育との関連を明らかにして、二誌が近代の被服管理に果たした役割を、考察してみたい。

（方法）「婦人の友」は日本近代文学館収蔵の３３５冊、「主婦の友」は御茶ノ水図書館の全３４７冊につき調べる。婦人の友創刊から大正５年までを一期、主婦の友創刊の大正６年から昭和５年までを二期、以後を三期として区分した。掲載記事を内容的に管理論、管理法、染色、その他に分け、更にそれ等を小項目に分けて検討する。

（結果）１．掲載総数　婦人の友（Ａ）１４７篇　掲載率　43.9%、主婦の友（Ｂ）は２２９篇　66.0% と高い。Ａは生活の合理化を軸に簡易性、経済性からの衣生活論、整理論により読者を啓発、Ｂは具体的に「仕方、秘訣」の記事による技術教育と見なされよう。染色記事はＢの42.9% が最も高く、第２期は染色の時代である。Ｂは絞り染めの流行に合せ、これを内職記事に取入れている。２、読者の記事は、Ｂでは応募染色作品が、Ａでは読者の洗濯等の実験報告が目立つ。また、Ａは読者質問欄「衣類整理問答」を大正７年から連続３０回に渡り掲載。３、両誌とも、記事に連携する講習会の開催、講座本の出版を行い、成果を上げている。４、執筆者の人脈は当時の女子専門学校と合い通じている。、